今こそ谷川士清翁顕彰の好機

顧問　　三ツ村健吉

谷川士清翁生誕三百年祭は、平成21年（2009）に予定され、いよいよあと４年に迫ってきていますが、今展開されている動きをみる限り、その祭典には意義ある成果が期待されるものと確信しています。

会員各位の今日までのご努力・ご活躍などが重なって生まれた実績を多として敬意を表すると共に、小学校への出張講座、親子洞津塾、薬草園の整備、作品コンクール、ひいては今年度から始められた「語り部ボランティア」などの活動を通して、士清翁が津市民の心の中に占める重みが漸増していく手応えを痛感するこの頃です。

また、既に将来に向けて、素晴しい研究所の開設が計画され、生誕三百年祭を記念した士清研究の舞台が約束されようとしていることは、これまた大きな弾みになることと期待しています。

充実した記念行事を通して、士清翁の業績を天下に宣揚するためには、如何にこの祭典に取り組むべきか真摯に考える時が来ているのです。今こそ会の総力を挙げて、津が生んだ偉大なる国学者「谷川士清翁」を現代に蘇らせ、平成の光を当てて顕彰する心意気で、この千載一遇の好機を生かしていきたいものです。

今後、私たち会員の一人一人が士清翁を核とした一族、殊に俊才の誉れの高かった長男士逸について調査研究をすべきであるし、士清翁と本居宣長翁との学問上の美しい交流や、「和訓栞」の研究などに更なる理解と研究を深めていきたいものと考えます。

研究部会の活動

次の３つの勉強会を行いました。

１．８月７日　勉強会「和訓栞の成立について」　講師　三ツ村健吉顧問

「和訓栞」の成立の陰には、士清の「日本書記通証」（全35巻）という労作の第１巻付録にある「和語通音」に感動した本居宣長（多分京都に遊学中に目にし、それ以後郷土の先輩士清の存在を意識したと思われる）との、国学者同士の美しい、時には厳しい励まし合いがあったのではないか。士清の晩年になっての大事業である「和訓栞」の執筆では、士清が眼病などのため「節略」（内容を簡単にする）という意図を漏らしたときに、「後々の為に『節略』など考えずに頑張ってください」という趣旨の手紙を送っていること、また士清も手紙だけではなく原稿の一部も宣長に送って、宣長の意見を聞いている節もあり、逆に宣長の「古事記伝」の仕事の過程でその原稿も見せ合っているし、必要な資料を提供してあげている。当時の士清家には随分蔵書があったらしい（「和訓栞」成立秘話のような部分を二人の書簡の交流の中から探った話。……録音テープより）　（文責　佐野）

２．９月４日　勉強会「谷川士清旧宅について」　講師　森　晋代表

森代表から、旧宅の歴史や構造について、詳しい資料を使ってのお話を聞きました。

３．12月11日　勉強会「『恵露草※』について」　講師　楠　皐会員

楠会員から、谷川士清が生きていた頃の歴史的背景について、他の資料と比較対照してのお話でした。

（塚澤）

※『恵露草』…宝暦２年（1752）（士清43歳のとき）２月に、有栖川宮に歌道入門を願い出て、同５月、その許しを得てから以後の自作を、宮が御題を出されたり、添削されたものなどを含め、１集とした歌集。明治末期、歌人佐々木信綱博士によって確認された稿本。（石水博物館蔵）